

# 当院における自己血輸血状況

結石 杏奈 高木 豊雅 音羽 裕子 川越 善子 宗川 義嗣

奈良県立奈良病院 中央臨床検査部

【はじめに】自己血輸血は同種血輸血による副作用を避ける安全な輸血として推奨されている。今回は当院における術前貯血式自己血輸血の現状について検討したので報告する。

【対象および方法】対象は、平成16年4月から平成21年12月までに自己血貯血を行った全症例。方法は貯血人数、回数、貯血量、輸血量、廃棄量、同種血併用の有無について解析した。更に、貯血量が最も多かった産婦人科の平成20年4月から平成21年12月までの貯血量、輸血量、同種血併用の有無について詳細な解析を行った。

【結果】平成16年4月から平成21年12月までの全症例について解析した結果、総貯血人数885人、貯血回数2090回、貯血量4045単位、輸血量3011単位、廃棄量1034単位、廃棄率25.6%、その中で同種血の併用は44人(RCC227単位・FFP42単位・PC30単位)であった。年次別、診療科別の自己血貯血状況及び廃棄率は図1・図2に示す。

平成20年4月から平成21年12月の産婦人科における自己血貯血は婦人科が135人596単位、産科が51人302単位で、輸血量は婦人科が371単位、産科が129単位であった。廃棄率は、婦人科37.8%、産科が57.3%で、同種血併用は子宮頸部癌、体部癌が各1人、卵巣癌が8人、前置胎盤が1人であった。同期間における、疾患別の自己血貯血量及び輸血量を図3・4に示す。

当日は平成22年1月から3月のデータも加え報告したい。

【考察】自己血貯血量は、産婦人科が全体の約60~70%を占めている。年々貯血量が増えている中で、18年度は一次救急の受入れ減少、20年度はNICUの4ヶ月間病棟改修等の理由により前年に比較して減少していると考えられる。一方、産科領域での自己血廃棄率が近年急増している。これは危機的出血に備え貯血量も増えており、奈良県の周産期医療の現状を反映していると考えられる。

図1)年次別自己血貯血状況

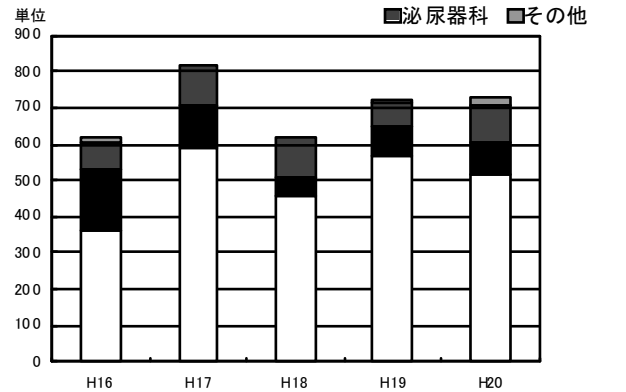


図2)年次別自己血廃棄率

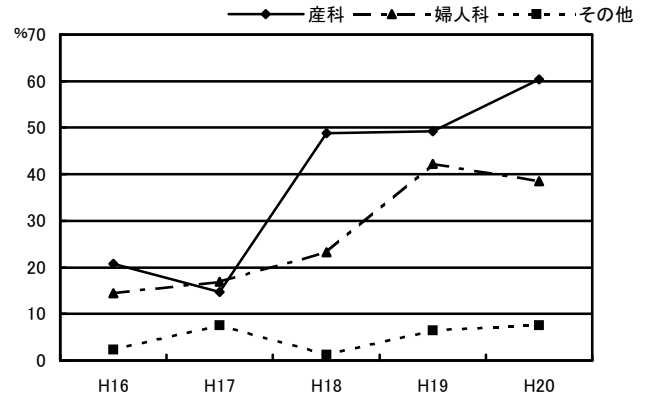


図3)婦人科

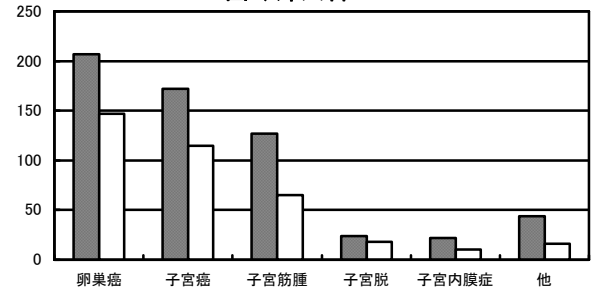


図4)産科

